

欧ア協会シリーズ

No.73

最近の中国政情について

中 嶋 嶺 雄……………(1)

最近のアジア情勢について

矢 野 暢……………(34)

欧ア協会研究会講演録

社団法人 欧 ア 協 会

本篇は欧ア協会が、昭和五十年四月二十四日開催した研究会に於ける東京外国語大学の中嶋嶺雄助教授の御報告と、それに続く質問応答の速記録である。

最近の中国政情について

東京外国語大学助教授

中 嶋 嶺 雄

今日は講演会ということではなくて研究会ということだそうですので、日頃の研究成果の一端を御披露かたがた、私は最近、中ソ対立下の国境地帯をソ連、モンゴル、中国と縦貫してまいりましたから、その印象も含めてお話ししてみたいと思います。中国なりソ連の問題についてはすでにそれぞれスペシャリストでいらっしゃる皆さまを前に、本日もどういふ点をお話ししようかと考えてまいったのですが、やはり旅行の印象からお話するのがいいのではないかと思います。私が中国に行きましたのは一月の初旬から中旬にかけてです。たまたま、私の滞在中に全国人民代表大会の前半が始まっていたわけでした、その辺の問題については既に二、三書いたものもありますが、しかしその後ご承知のとおり政府の学術文化代表団が中国に

行かれて、そろそろそちらのほうの印象記も出ていますから、私の印象は若干古くなってしまいうわけであり
ます。しかしながら一つはウランバートルから北京まで汽車で入ったということ、もう一つはたまたま私
の滞在中に全国人民代表大会があったということ、三つ目には、私自身八年ぶりの訪中として、文化大革命の
あの激動のさなか、一九六六年の秋に中国を訪れたときとの比較という点では、やはり若干皆さんにお話
することがあるような気がします。

まず北京で今回驚いたことは、やはりこの八年間の変化というものが非常に大きかったということです。
ともかく八年前の訪問の時期が文化大革命の渦中であつたためか、それとの比較が余りにも鮮烈であるた
めか、全く別世界のような感じを受けたわけです。文化大革命の激動期で、あらゆるところで毛沢東を讃
えるスローガンや讃歌があり、毛沢東語録があり、歌と踊りのあのご承知のような状況というものは、今
全く影をひそめております。毛沢東語録なども、これを持って歩いている人をついに一週間の滞在の間に
見ることができませんでした。もとよりあちこちにスローガンが掲げられています。それらのスローガ
ンも、故宮博物館やホテルなど人々の目につくところに整然と掲げられているだけで、かつてのように到
るところに書きなぐつてあるということは全くありません。これはモンゴルから中国に入つてすぐ気がつ
いたことですが、到るところの農村の壁にかつてはスローガンが書きつけられておりましたが、そういう
ものを全部消した跡があり、きれいに塗りかえていました。このようなことは例の故宮博物館でも同じで、
大きな城壁に書かれていたスローガンを明らかに塗り消した跡などがあるわけです。こういうことに象徴
されるように、ともかく街頭的には非常に落ち着いた雰囲気になり、人々の表情もその点でなぜか落ち着
いていたような気がします。今日、町を歩いていると紅衛兵なども見かけますが、これは現在はおかつての

ように政治的な任務を担う紅衛兵ではなく一種のピオニール、日本でいうある意味でのボーイスカウト、
ガールスカウトみたいな感じであります。私は紅衛兵に今回いろいろしゃべつてみたのですが、大体中
学生でクラスの七、八〇%、上級中学、つまり日本の高校生に当るのではもっと多い八〇%以上が紅衛
兵になるというようなことを聞いていましたから、もう紅衛兵が特殊なものではなくなつてきて、それだ
けに必ずしも腕章などつけていないものもあるような気がします。いずれにしても、かつてのように政治
的任務を担っているわけではありません。

街頭的なことであるいろいろな気がついたことをまず申し上げますと、例えば自動車などが非常に多くなつて
いる。かつてはほとんど自動車というものを見かけませんでしたが、北京近郊の農村などでは自動車が踏
切待ちをしているというような状況。それから八年前にはトラクターとか耕運機などが実際に動いている
のを見る機会は一度もなかった。中国のグラビアを見ますと、人民公社などにより盛んに農村に機械化が
進んでいるように伝えられています。実際にはそうではなかったんですね。ところが今回は北京近
郊の農村の風景の中にも、幾つかそういうものが実際に動いているという状況も見ることができました。
それから自転車も非常に新しくニューモードのものが出てきているわけです。また同時に洋服も、かなり
人民服などで統一されていますが、ネツカチーフで女の子がおしゃれをしたり、かなり色が豊かなもの
になつてきているような気がします。それやこれやともかく北京は現象的な表面には非常に静かでありま
す。ウランバートルというところは社会主義の遊牧国家といわれながら、ものすごく日常生活の上でも、
イデオロギー的にも厳しい。ウランバートルの科学アカデミーの正面にはスターリンの銅像が依然として
そびえているというイデオロギー状況があると同時に、日曜青空マーケットなどに行つてみましても、本

当にイデオロギーの敵しさの上に貧しさというようなものがおおいかぶさっているような現状を痛感しましたが、それに比べるとやはり北京は天国であります。東風市場、東単、西単の市場なども、大体香港の国家会社と同じような品物がそろっています。その点でもこれは八年ぶりの大きな変化だといえるような気がするわけです。それと同時に、そういう日常的なノーマリゼーション、ある意味での中国の着実な発展、そういう状況にやはり目を奪われると同時に、ある意味でそういう日常的な平穩の中に民衆がどっぷりつかっているような感じを受けました。

例えば批林批孔運動ですが、私の見る限り党幹部と知識人の間の運動でしかないというような印象を強く持ったわけです。これは日本で『人民日報』や『紅旗』を見てみると、いまや文化大革命に次いで新しいキャンペーンとして批林批孔運動が十全大会以降起こったかのように感じますが、実際に私は北京でも批林批孔運動の学習風景というようなものには一度もぶつかりませんでした。新華書店などをのぞくと、ものすごくたくさんのパンフレットなどが出ていますが、しかしながらそれほどみんなが熱心を買っている風景もありません。第一、批林批孔運動というものが私の見る限り昨年の秋から方向転換して、批林批孔運動に含まれていた政治闘争的な路線闘争的な色彩は、一たん再団結という方向に転じたような気がします。それと同時に批林批孔運動の具体的な論調がものすごく瑣末主義になった。非常に細かい問題をめぐって、どうでもいいような議論を繰り広げている。こういう非常にスコラ哲学的なキャンペーンに対し、はたして中国の民衆がどこまでそれにくっついていけるのかという問題があるわけです。私も約百種類くらいの批林批孔運動関係の文献を買ってきましたが、おそらくそれを丹念に見る気がしないほど非常に瑣末なものになり始めている気がします。そういう状況の中で、実は後ほどお話しますが、全国人民代表

大会が開かれていくわけです。

例えばこんな経験もしました。私はウランバートルから北京まで三日間、ゴビの砂漠を越えて汽車旅行をしました。大変興味深い旅で、ある意味では日本人のロマンティックな情緒をさそうのかもしれないが、実際には非常に単調な状況のなかを汽車に乗り、やがて内蒙古を経て北京に着いたわけです。ウランバートルから国際列車は中国の汽車になりますので、服務員は中国人が三人乗っているわけです。もっとも国際列車といってもお客さんは私とブルガリアの大使館員だけで、ブルガリアの人は言葉もおそらくできないだろうということと部屋に寝ていただけですから、実際には私一人みたいな形で、それに服務員が三人ついでおりましてゆうゆうとしたもので、かなり親しくなりました。見てみますと、時間があけばトランプをやっているんです。あとはちょっと小説を読んでいるのを見かけましたが、そのほかは雑談しているだけで、もちろん批林批孔運動の学習もしていません。要するに暇があれば一生懸命トランプをやっている。トランプもおそらく賭けてやっているんでしょう。別にお金を賭けるとは思いませんが、われわれもやるように「正」という字を幾つか重ねていくわけです。三人が勝点を書いてトランプをやっている。これは北京でも、新僑飯店のホテルの服務員がやはりトランプをやっていて私も驚いたのですが、まあ従来とはずいぶん雰囲気が違うことは、その一点にも現われているような気がします。日曜日の頤和園とか故宮博物院は、まさにそういう点で東京の日比谷公園などと変わりないような雰囲気が流れていたような気がします。

さて、そこでそういう面だけをとると、現在の中国は非常に落ち着いて全てに問題がないかに感じられるのですが、そういう中国の中で全国人民代表大会が開かれたにもかかわらず、そのことはご承知のとおり

大会が終了するまで一般には知らされない。まさにそういう世界がもう一つあることを忘れるわけにはい
かない。

その前に少し追加しますと、もう最近北京に行っている方は何人もいるのである。あるいは皆さん十分ご承知
かと思いますが、手鼻をかんだりたんを吐く人が非常に多くなったことですね。八年前には全然見かけま
せんでしたが、今回は非常に私の目につきました。そういう意味でも中国は当りまえになったんだという
ふうに感じるができます。

それからホテルの服務員その他も過度のサービスをしなくなった。これはある意味で外人がかなり多く
なったということもありますが、私の場合は今回は単身、北京で向こうの人が誰もつかずに放り出してく
れましたから、もちろん日本政府の大使館などにはいろいろお世話になりましたが、そういう点では素顔
の中国をできるだけ見えてきたつもりなんです。よく北京に短期間行った訪中報告などがありますが、北京
の飛行場に降りて先方の車に乗って、あの立派な北京飯店に泊って、万里の長城や明の十三陵というよう
な観光コースを回って人民大会堂あたりで先方の首脳と会って、人民公社を見学して、そしてあわただし
い予定を終えてまた飛行場に車で帰ってくるというだけでは、おそらくショーウィンドの中のスポ
ットライトを浴びている部分しか見ることができないんですね。その点で私は今回も時間の許す限りあち
こちの胡同、市場の中を歩き、観察してきたわけです。そうしますと、北京はものすごく大きな断絶がある
ところだということを見せざるを得ません。その断絶というのは、二つの面からいえるような気がします。
一つは非常に表面的なことですが、訪中の政府代表者などが泊る北京飯店はものすごく立派になりました。
これは帝国ホテルと比べても損色のないような立派なホテルです。あるいは北京駅もまた文革のときより

ももっときれいになり、これも確かに東京駅と比べても損色がないようなものですが、そういうところと、
一步そこから裏に入ったところとの違いの大きさ、今度は目をおおいたくなるばかりの、ある意味での遅
れというものが目立つのです。ですからもしも北京駅を見られたら、北京駅前の長安街を隔ててすぐ前の、
ちょうど東京の八重洲口に当る位置にある朝陽門南小街をちょっとごらんになると、これが首都北京の駅
前通りかと思うくらいにきたなくて大変なところです。また、あるいはよく浅草、上野に比較される前門
外の小路などを歩いてみても、やはり、私みたいに戦後派、つまり解放前の中国を知らず中国というのは
めざましいというイメージの中で育ってきたものからすると、そのめざましい中国の人にこんなところが
あるかと思うくらい本当に遅れているわけです。非常にきたないし、壁はぼろぼろ、汚物は道にたくさ
んある。そういうところが依然として残っている。これには私もがく然としまして、やはり中国自身が主
張しているように、まさに発展途上国なんだということをまざまざと感じてきたわけです。あるいはあま
り日本人の観光客などは行きませんが、鼓楼と鐘楼がありますね。天安門と全く正反対の位置にある故宮
博物院、景山、さらにずっと北側の地安門、それから鐘楼があり、鼓楼がある。この辺の典型的な中国の
下町などに行っても、まだまだ中国は大変だということを痛感するわけでありす。それからもう一つの
断絶は、あの北京という市内の中にも、もちろん政治の厳しさがあるわけですが、一般民衆が全く近寄れ
ない部分が非常に多いということです。皆さんの中にはおそらく老北京の方がたくさんおられると思いま
すので、私がこんなことをいうのは僭越かもしれませんが、北京のあのシンメトリカルな風景をもう一
度確認したいというのが私の希望でしたので、北京に行ったら是非景山公園に登ってみたいと思ってい
ました。

ご承知のように故宮博物館の裏側の景山に上りますと、北京の市内は一望のもとに見え、左右対象のすばらしい北京の市街風景が望めるはずなのです。かつて文化大革命のときはそこなどは立入禁止だったのは当然ですが、実は今回も景山公園などは一切立入禁止です。それから驚いたことに、あの有名な北海公園、これが全部立入禁止で厳重な鉄柵で全部囲ってあるんです。北海の上にかかる橋などは鉄柵があって、三十メートルおきに番兵が立っています。鉄柵の一メートル以内には近寄ってはならない。私はあえて、若干挑発的だったんですが、一メートルぎりぎりのところで番兵を入れて写真をとってきたんですが、これなどは意外に知られていない事実ではないか。非常に平凡なことですが、なぜ立入禁止かというものは、いうまでもなく中南海に近い、つまり毛沢東などの首脳がいるところに近いからですね。なぜそこを厳重に警戒するのかを考えてみますと、やはり林彪事件が起こったのがつい二、三年前のことですから、今日の北京というのはいやほやそういう状況が一方にあるということを忘れるわけにはいけません。日本にたとえてみると、皇居が中南海であれば竹橋のプレスサイド・ビル（毎日新聞）のあたり、それから丸ノ内のビル街、そういうところは一切立入禁止で、日比谷公園がちょうど北海公園に当たるとすればそこが立入禁止、そして祝田橋のあたりには鉄柵があって三十メートルおきに番兵が立っているということにならざるを得ないんですね。こんなことは非常に小さな事実かもしれませんが、かなり象徴的なことで、しかも意外にこのことは知られていない。私なども大学の同僚である中国語の先生に話してみますと、さて困った、中国語の会話の本には、明日北海に行つてポートを漕ぎましょと書いてあるんだけど、全然立入りできないんでは会話の本も書き替えなければいけない、といつておられました。まさにそういうことなんで、意外と知られていない事実ではないか。それから今回、吉川幸次郎さんが確か北京図書館に行かれたという

ことを書いておられました。一般には北京は今でも図書館は全部閉館です。それから博物館が全部閉館。革命博物館、歴史博物館を初め幾つかの博物館がありますが、そういうところが全部、外国人も北京の一般の民衆も入れない。おそらく北京図書館などまだ一般の民衆も入れないはず。こういう現実がやはりあの世界の中にはある。ですから表面的には非常に落ち着いてのんびりしたムード、それなりに生活も向上しているにもかかわらず、そういう意味での厳しき、断絶というものがあるのだということを確認せざるを得ないわけであり。そういう中で私自身がまたま中国に行つたときに、何か人民代表大会が開かれそうだという雰囲気を感じて私自身もそれを追跡してみました。そして私は実は中国を免つときには完全に全国人民代表大会が開かれそうだとこのことを確認して日本に帰ってきたわけです。従つて若干の関係者の方にはそのことを申し上げておいたのですが、そうしたら予想どおり人民代表大会が開かれた。なぜそんなふうに感じたかといいますと、幾つかのインディケーションがあります。まず、国際列車で北京に着いたんですが、国境のときには一等寝台の車両は一台しかなかったんですね。国境駅は、モンゴル側の国境はザミンウデ、中国側は二連なんですが、二連では半日くらい止まりましたが、車両は一両でした。やがて北京に着くと一等寝台車が二両になっています。一等寝台車というのは普通の中国人は乗りませんし、しかも降りてきたのは幹部然とした人である。夜中に集寧で車両の連結をしていたので、おそらく集寧で一両貨車を追加して、それで大同、張家口あたりの地方幹部を運んできたんだろうと思います。これは何かやっぱりありそうだということを、まず北京に着いたその瞬間に感じたわけです。そうしたら迎えてくれた日本大使館一等書記官の私の友人から、既に香港代表がきているらしいということを私は聞きました。そういうしているうちに一月十三日になると、一般の日本人が泊っている新橋飯店に、民族飯

店に泊っていた日本の商社の連中などが全部引越さされました。そして同じ日に友誼賓館も、ここには日本航空の駐在員の私の教え子がいて久しぶりに会うと、地方からぞくぞく代表がつめかけてきているという。だからこの日も次の日も人民大会堂の回りをぐるぐる回ってみたのですが、確かに電気が必ずついていて番兵が非常に多い。ちょうど国会議事堂の回りにデモ隊などがくると黒々と機動隊がやっでの陰なんか隠れている、ああいう感じで番兵が非常に多いんですね。それからもう一つ決定的だったのは、帰る前の日に旧鼓楼大街のあたりを散歩してみたとき、これは実は写真がある週刊誌がグラビアで使ったのであるいはごらんになった方もあると思いますが、赤、黄、緑などの短冊のようなステッカーが貼ってあって、その中に「第四期全国人民代表大会の開催を迎えよう」というスローガンがまさに糊あともなまなましく、貼ったばかりであります。それからその辺一帯は非常にはなやいだ雰囲気があって、赤いステッカーが、社会主義の大院、社会主義の連合院、三つの紅旗が合わさった大院とか、六つの団結の大院、そういうふうな例の中国式の家の門のところに貼り出してある。これは余り見たことのない現象でして、『人民日報』などにもこういう言葉は余り出ておりません。いろいろ調べてみましたが、どうも新しい一つの最末端の単位ではないか。かつて人民公社が都市にも作られたことがあり、それは結局成功しなかったわけですが、最も基礎単位の町内会、隣組のようなものではないかと思うんですね。そして門があつて院子（庭）があつて、その中には幾つかの家族が住んでいます。例えば三つの赤旗の大院というのは三大家族が住んでおり、六大家族が住んでいると六つの団結の大院というふうに。こういうところからおそらく全国人民代表大会の代表が選出されたんじゃないかという感じなんですね。その町内から代表を選出して、こういうスローガンを貼った感じですよ。私はそういうわけで北京の町をできる限り歩き回ったん

ですが、こういうスローガンがあるのは旧鼓楼大街だけでした。そういうことからこれは完全に全国人民代表大会に近いということを感じたわけです。しかしながら一般の民衆にはもちろん知らされないし、あれほど多くの人が監視しているにもかかわらず、新聞記者はもちろんいろいろ気づいているでしょうが、ただ日本の新聞記者の中には、私が鼓楼の現象を話したら、鼓楼ってどこだというふうに、短期の旅行者である私に質問した人がありましたので、北京の新聞記者はやはりずいぶんのんきなんだなあと、若干がく然とした思いがあります。しかしながら、にもかかわらず在外公館の人などがいろいろ見張っているのに、全人代の開催がわからなかった。これは私もかつて申し上げたことあるのですが、いうまでもなく地下道を通して全部代表が集まっているのだろうと思います。しかも今回の全国人民代表大会を見ると、周恩来報告にも張春橋報告にも憲法の前文にも、あらゆるところにあるのが、深く地下道を掘ると覇権を求めないというスローガン。まさにこの二つは今期の中国の最も原則的なスローガンです。そのことからしても代表たちが地下道を通ってくるというところは当然のことかもしれませんが、やはりそういうような形にせざるを得ない政治的な問題が一方には残っているということを見ておく必要があるだろうと思います。

全国人民代表大会については、私は今からその解説をするつもりはありません。もう既にいろいろな論争が始めております。確かにこの全国人民代表大会によって中国は国家体制を整備しましたが、しかしながらそこには幾つかの矛盾があるような気がします。その矛盾というものを一口にいいますと、憲法を見る限り、いわゆる毛沢東思想、ないしは造反原理、例えばストライキ権の問題、そういうものが非常に定着したかに見えます。つまり毛沢東思想を最も強く主張する人たちの名は、そこで実現された。しかしな

がら実際の人事面を見ると、やはり行政官僚の非常に厚い壁がそこにあって、旧実権派プラス実務派官僚

のグループが主要な人事を占めたことは否定できないような気がするんですね。そうするとこれはある意味で党の一元化、制度的には党・中央が中心になり全てが党中央に統括され、全国人民代表大会自身も制度的にはまさにこの党の中の一行政機構であるかのようになりました。そして党を統括するのは毛主席ですから、毛主席の下に全て一元化されたように見えながら、しかしながら人事面においては、そういう縦座標に対してもう一つの横座標が非常に大きくクロウズアップされているわけで、これはやはり一つの基本的な矛盾ではないか。この矛盾を結局調整できず、全てを今後に残したというふうにいわざるを得ないような気がします。しかも今日の中国ではあらゆるリーダーたちが、毛沢東以後ということに非常に大きな関心を持っているわけで、こういう毛沢東以後ということを十分意識した上で、暫定的な一種の過渡期の体制がここにはできた。それが全人代であったんだということに考えざるを得ないんですね。特に注目すべきことは、批林批孔運動の中で当初出てきた大きなスローガン、「反潮流」ということばが消えてしまったことです。つまり潮流に逆うことこそマルクス・レーニン主義の原則であるという精神は、十全大会以降非常に鼓吹された言葉です。王洪文などもまさにこの反潮流を非常に鼓吹したのですが、もしも批林批孔運動というものが非常に全面的な成果を上げて、その延長の上に全人代が開かれたとするならば、この反潮流という言葉は一つくらい出てきてもいいと思うんです。ところが今回の全国人民代表大会ではいろいろな文献などを見ても、反潮流という言葉、潮流に逆うという言葉が一つも出ていない。潮流とはどちらかというのと脱文革、いわば毛沢東の路線を形骸化していくほうであり、それに対して逆うことが必要だ。だから批林批孔運動が起こったわけですね。こういうふうにと考えると、反潮流運動という言葉

が出てきていないということは、ある意味で毛沢東側近グループと毛沢東路線により忠実であろうとする急進派のグループの、一定の後退を意味したんだろうと思います。そのことが人事面に現われたと見ざるを得ない。

しかしながら中国においてはこれまで常にそうであったように、前回も九全大会によって上からの文革の收拾がなされるとその直後に林彪事件へつながる動きが出てきたし、十全大会で林彪を打倒した成果が讃えられたかと思うと批林批孔運動がわき上がってきました。同じように今回全人代でとにかく国家の体制を整備したと思うと、また中から姚文元、張春橋という非常に注目すべきイデオログの論文が相次いで現われたわけです。(姚文元「林彪反党集団の社会的基礎について」、張春橋「ブルジョア階級に対する全面的独裁について」)そうするとやはり、そういういわば運動の繰り返しをせざるを得ないという問題が依然として残るような気がします。

そこで現在の段階は、一種の妥協とそして今後全ての問題を毛沢東以後の時代へ持ち越した、問題の一種の雌伏期であり、同時に一つバランスが崩れるとどうなるかわからないという不安定性を持っているような気が、私はいたします。かろうじてバランスを支えている一種の凝集力は、やはり毛沢東がかなり老令化してやがて次の世代へいかざるを得ないという状況の中で、再び余りにも醜い混乱は避けたいという一種の了解があるのかもしれない。もう一つは、私今回中国に行つてつくづく感じたのですが、今中国は表向きは大変虚勢を張つて、毛沢東思想が世界を照らしている。中国のいうとおり世界は大動乱であり、天下大乱の世であつて、ますます中国の路線が貫徹されている、というふうに見えるのですが、実際には中国はまだまだこれから大変な社会であります。そこに除々に国交が開かれていくと、外の世界からの外圧、

一種の自由化の外圧がより本格的にのしかかってきますね。こういう問題にどう対処しようとするのか。そういう外圧に耐えるのも一種の凝集力が必要になるわけで、そういう点でとにかく今問題が凍結されているんですが、決して問題は解決していないような気がします。そのことを示すのが姚文元と張春橋の最近の論文ではないか。しかもこれがまさに全人代によって新しい国家体制が整備された直後に出されたという点を、注目してみる必要があるような気がします。

それで、姚文元路線と張春橋路線について若干私の感想を述べてみたいと思います。特に姚文元論文は北京周報にも翻訳されていますので、ぜひ皆さん一度お読みいただきたいと思いますが、一口にいうと、中国の政治的世界における権謀術数、あるいは政治的な心理の読み取り方、こういうものはある意味で実に鋭く複雑で、しかもまさに中国人らしいということを私は感じました。私たち日本人などはその点では実に淡泊で、自民党の派閥争いなどというのはこの中国の政治の葛藤に比べると、本当に幼児と大人の世界の違いがあるように感ずるくらい、非常に政治心理学的に興味のある論文なんですね。ですからわれわれ日本人が中国についてするいろいろな推測を、全て中国人は当然した上でああいう政治的な世界が存在していると考えざるを得ないような印象を私はまず受けたわけです。それほど一つ一つの言葉使いには幾つかのインプリケーションがあるような論文です。題名は「林彪反党集団の社会的基礎について」、ともかく姚文元がここでいおうとしていることは、林彪集団の形成過程は非常に深い社会的、階級的基礎を持っているんだということ、その社会的、階級的基礎というのは、林彪集団が消滅したとはいえ依然として残っている。具体的には特に賃金制度、八級賃金制というものが今日の中国にあるわけですし、商品経済がやはり残っている。それから物質的刺激という問題が残っている。今回の憲法でも社会主義憲法なのですが、

共産主義の世界ではないので依然としてこういうものが残ることは当然だというのが、憲法の保証であります。ところが姚文元論文は、むしろそういうものが残っているが故に常にブルジョア化し、プロレタリア独裁が脅かされる。そして林彪集団みたいなものが出てくる基礎があるので、それを本当に気をつけなければいけないということをしているのですが、その全体の論調は、林彪以外に現在の指導者の中にまさに新しいブルジョア階級が形成されつつあるというような、非常に不気味な論調だというふうにもいえるわけです。そして例えば合法ルート、不法ルートでその商品経済の網の目をくぐりブルジョア的な利権をあさり特権化している人たちがやはりいる、ということもいつている。実際の中国は、ソ連に比べればその点はかなり平等社会なのかもしれませんが、私どもが旅行者として行ってもいろいろのことを感じます。例えば普通の民衆はとても車などに乗るような状況ではないのですが、やはり軍の幹部などは黒塗りの「紅旗」号で町を乗り回している。それから日本大使館などの人はもつと詳しいんですが、外人だけが利用できる国際クラブみたいなどころがあるんです。そこは友誼商店とは違って食事ができたり、若干の遊戯施設があったりするのですが、こういうところにもやはりその担当の幹部は家族を連れてきたりして参加している。それも一種の特権なのかもしれませんね。こういうところを含めて合法ルート、不法ルートでの、幾ら制度が厳しくても常にそういう問題が起るといえるのは、これはまさにある意味で中国人社会の特性なのかもしれません。私はかつてマカオの暴動のときに、毛沢東語録を掲げながら阿片を売っているのを知って驚いたことがあります。これなどは表面的には革命的なことをいいながら、実際には阿片を売っているわけで、姚文元はそういう類のことについて非常に強い警告を発しております。しかも姚文元論文は全て現在形で書かれている。例えば、文革以来非常に重要な幹部の養成機関としてできた五・七

幹部学校については形を変えた失業ではないかということを知っている者が現在もいる、それから下放運動は形を変えた労働改造であるということを知っている人がいるとか、物質的刺戟に対する批判は結局そういうことを批判することによって搾取するのだ、人民がそれだけ潤うのを搾取するのだということを知っている人がいる。最も興味深い表現として紅衛兵運動について、紅衛兵たちはあのときに政治的に利用されて今捨てられたんだというようなことを知っている者がいる、と述べている。これらのことは日本で中国について論ずる際によく話題になることなんです。ですからそういうことは全部中国人は承知の上で、ああいう政治的ドラマを繰り返している。こういうことが現在形で語られているというところにも一つの重要な問題があるわけで、一体姚文元がなぜこういう問題をこの時点で提起しているのかということについても注目しておく必要があるような気がします。

もう一つの張春橋論文「ブルジョア階級に対する全面的独裁について」も、いわば姚文元論文を受けるような形ですが、私も中国にまだブルジョア階級がいるとか、地主がいるとかいうふうには思いませんけれども、まさにそういうものが復活し拡大する危険があるということを盛んに警告している。特に所有制の問題さえ基本的に解決されただけなのだ。基本的という言葉は、問題があるということだ、と知っているんですね。この辺も中国人らしいんで、今後中国が例えば、基本的に日中関係に満足しているという表現をしたときは、そこには問題があるというふうには彼らはいっていると思われるべきなんです。そういうことを知するためにもこの論文はおもしろいんですが。そして姚文元論文と同じようにこれもやはり現在形で、一部の同志は組織的には中国共産党員だが思想的には依然として入党していない、というようなことを知っている。そしてそれらの同志たち、どうか途中で止ることなく徹底したプロ独裁

へ進もうではないか。一部には共産風を吹かすものがあるという。ところが実際にはもっと悪い教唆扇動する犯人がいて、彼らこそそういうことをいうことで実際にブルジョア風を吹かそうとしているのである。一部の同志たちよ、やはり大きな大列に従って引き続き前進しようではないか、と。この辺は張春橋らしいんですね。姚文元というのは、ご承知のように江青夫人のサロンにいた若手幹部で、ある意味では口ばしの黄色いイデオログですからいっていることはかなり勇ましいんですが、張春橋のほうはそれに比べて包容力があるような気がします。さすがに彼はある意味で党の実務派としての器量を持っているような気がします。ですから姚文元ほどに決めつけていない。むしろ一部の同志よ、引き続き前進しようではないかという一種の呼びかけなんです。この問題がもし今後呼びかけで終らなくなった場合に、やはりそこに深刻な亀裂が起ころうということは考えておいたほうがいいような気がするわけで、姚文元論文に対する反批判として張春橋論文が出たのだと見ることもできるほど、中国の政治の中枢には深刻な問題が残っているということはいずれにしてもいわざるを得ないような気がします。

さて、内政問題をこのくらいにして日中問題に移りたいと思いますが、実は日中関係の推移自身が中国の内政問題と非常に不可分な関係にあることは、中国の政治と外交との相互関連性をみても当然のことだろうと思います。ご承知のように日中関係は、国交樹立以来ある意味で非常に順調に進んで来ましたが、私は当時から、日中間が急激にそんなにうまくいくのは本物ではないし、第一そんなにうまくいくはずはない、基本的に違いがあることを十分認識した上でもっとクールなルールをお互いに確立することが安定的な日中関係のために必要だ、ということを知り続けてきたつもりですが、一部にはその辺が全てべったりで、とにかく日中友好ということが強調されすぎたような気がします。そうしますと必ず反動がくるわけ

です。ともかくもこれまで日中関係は非常に順調にあって、政府間の関係も非常によかったです。でも最近に到ってそういう日中関係に対する中国側のいら立ちを見る事ができる。それは廖承志や紀登奎の発言その他にも現われているわけですが、三木内閣に対しても中国はいらいらしているのではないかと確かにそういう点もあるわけですが、幾つかの要因がそういう中国側の若干のいら立ちをもたらしているような気がします。しかも基本的な背景は、いま私が申し上げたような内政面にあるのではないかと。ある意味では日中関係における周恩来なりあるいは廖承志などを含める周恩来グループだけの対応ではなくて、一方に内政上のつき上げみたいなものがあるが故に、日中関係もそう簡単ではなくなったような気がいたします。だから中国のいら立ちは内政問題が第一。

それから第二番目には日中貿易の停滞の問題があるような気がします。これは私が申し上げるまでもなく、皆さん方の中にもっとご専門の方がいらっしゃると思いますが、私などが見ているところでも確かに日中貿易の貿易総額は三十億ドル前後にまで伸びてきているわけですが、ここまでは予想されたとおりのことです。従来の絶対量が少なくなったから。しかしながらそれ以降日本の不況、石油危機等により日本の製品コストが高くなった。一方中国は外貨不足という問題があり、貿易の逆調という問題を埋めるためにも対日輸出をしたいところですが、日本側には中国から買うものがあまりない。この春の広州交易会もおそらく、ここ一年来すでにそうですが、大した成約が望めないような気がします。肝心の石油は、ご承知のとおり昨年度も当初の予定より少なく、実際には約四百万トンですか。そして最近ではむしろ若干ダブつき始めており、しかも日本にはアラブの硫黄分の多い石油を精製するような装置があるものですから、必ずしも高品質で値段の高い中国石油を買う必要もないということもあって、従来予想されたようにやがてたちどころに二千万、二千万トンにいくかどうか、非常にその点でも問題があるような気がします。このような日中貿易の停滞というような問題、そこへもってきて政府間の問題、先ほど申しましたように三木内閣の評価にしても、ご承知のとおり田中・大平外交の時代には非常に強いパイプを持っていた中国が、今日必ずしも三木政権と強いパイプを持っているとも思えませんし、そういう点でも幾つかのいら立ちがあったような気がします。むしろソ連と三木政権との関係などについても、中国はいら立っていたのかもありません。

そういう一種のいら立ちがある中で、例の覇権問題というものが出てきたのではないかと。

私が一番わからないことは、外務省は昨年十二月頃の段階では、日中平和友好条約は日ソ平和条約とは根本的に違う友好条約で、もともとその平和条約という言葉がまずかつたんでむしろ友好条約であるから大した問題はないし、非常にスムーズにいくであろう。今の日中間の友好関係のベースに乗って国会の批准は可能であろうという、極めてオプティミスティックな見通しに立っており、中国側もそのような方向にあったと思うんですね。そして領土問題などは棚上げということで合意はついていました。その中国がなぜあの一月の段階で、陳楚大使が全国人民代表大会のあと日本に帰ってきて覇権問題にあれほどこだわったのか、これは一つわれわれ自身考えてみるべき問題ではないかと。もしも中国が覇権問題にこだわらなければ、日中平和友好条約はもう今ごろ国会の批准というところまでできていたかもしれません。そしてもし中国が日中平和友好条約の締結そのものを問題にするのであれば、あえて覇権問題を出さなかつただろうと思います。この問題について、私はある面こういう問題があったと思うのです。一つは、中国の内政との関連で、あまりにもずるずるの形で日中関係であっては困るといって、原則を主張した、

どちらかというとなら革命外交への再轉換の要素が一部にあったのではないか。それからもう一つは、日本のほうは例によって日中平和友好条約の国会批准オーケーということが新聞にも出ていたものですから、そんなに簡単なものであればもう一つ押せば日本はそのままのむのじやないかという中国側の、ある意味では誤算でしょうね。そういう姿勢もあったような気がします。実際にはご承知のように、それと同時にソ連の側もものすごい対日攻勢をかけてきて、結局最近の状況になっているわけです。それだけに覇権問題というのはかなり重要な問題であり、私は幾つかの選択肢が考えられると思いますが、やはり少し時間をかけるのが一番いいような気がします。

日ソ関係についてはいつも日本は北京のことを気にしているのに、こと日中関係についてはあまりソ連のことを気にしていないというのが、ソ連の今日の日本に対する認識だと思います。そういう形で日ソ中の三角関係ができていの中で、日本が覇権問題をこの期に及んで受け入れることはかなり難しくなるわけです。基本的に日本の安全保障その他にとってもソ連の脅威を無視することはできませんから、その点でも結局日本は今ある意味で追いつめられた立場にきてしまっている。これは現在の状況を論理的に考えますと、むしろ中国側のほうにいい分があるような気がします。中国で覇権ということはいい出したのはそもそも一九七〇年代の初頭からで、そしてかなり中国的なコンテキストの中で覇権という言葉を使っている。もちろん語源的には、「春秋の五覇」に見られるような、王道覇道の覇者の権力としての覇権というコンテキストがありますが、そういう状況の中で伏線として中国は覇権主義という問題を早くも七〇年代初頭からいっているわけですね。それが米中共同声明や日中共同声明、先ごろのマレーシアとの共同声明の中にも入っているのですが、実は中国はある意味での伏線をはっていたような気がします。まさにこ

の伏線とはソ連の六九年以降のアジア集団安保構想に対応する形の伏線だったのですが、それにある意味でアメリカも日本も乗ってしまったような気がするんですね。そういういわば覇権問題だと私は考えるわけです。そうすると一体日中共同声明の締結の段階でなぜこの問題をもうちょっと十分に日本側は考えなかったのかということが一つ。それからもう一つは、共同声明の際、日中国交回復はあの形が正しかったとしても、平和友好条約を近い将来に結びましょうというようなことをあの段階であえて、さらに屋上屋と架すようにする必要があったかどうか。日台が断交し、日中が国交を樹立し、共同声明に覇権条項を入れ、その上ある種のリップサービスみたいな形で平和友好条約ということをいう必要があったかという問題があるんですね。いわば日本側のある意味での過剰な対中サービスの結果、今日の困難な事態を招いているとするならば、これはむしろ中国の側よりも日本の側に問題があったし、大きなつけをわれわれは今払わなければいけないような気がするのですが、そういういわば日中外交の原点みたいなものにも関係してくるような気がします。ただそれを今さらどうこういって田中・大平外交を批判してもしょうがないですから、当面覇権問題についてわれわれは大いに苦しみ、つけを払っていかなければいけない。どういふうちにこの問題を処理するかという政策論をここで展開するいとまはありませんが、一つには中国側の要求を全面的に受け入れるという形があると思います。これは自民党の中の一部、あるいは社会党の一部、公明党などでもいっています。ただこのことはおそらく現在の日本政府は肯んじないはず。いうまでもなくソ連は反ソ同盟を形成すると見るわけです。ある意味でちょうどソ印条約の中にコンサルティング・アイテムが入って、一旦緩急あればソ連とインドは軍事、政治の両面で協議するという、あれも平和友好条約ですね。にもかかわらず実際にそういう項目が入ったことによって、中国はソ印条約を軍事条

約と見なしております。逆に今度は覇権条項が入ったものが、例えそれは平和友好条約であっても、日中間に結ばれるとなればソ連の側は軍事条約と見るわけでして、そのような選択はできない。それからよくいわれるように、日中共同声明の第七項の覇権条項を分断して、第三国については考慮しないという考え方もありますが、はたして今日の中国がそれを認めるか。それを認めるとすればもともと覇権問題というのはすごく簡単になるわけで、まさに中国は第三国の覇権に反対するということをいいたいのが、そもそも覇権を主張する最も重要なコンテキストですから、これは最も難しいということになります。三つ目の選択は、原則は貫くが文面上の表現をうまく変えるような字句の修正その他、つまり玉虫色の表現が考えられます。しかしながらここまで新聞などが書き立てている状況の中で、そういういかにも見えすいたことで問題が片付くかという点、どうもそういうことではないような気がします。それから四つ目は、全面的に中国の要求を拒否するという点ですが、これは現在の日中関係がここまできているということからすると、いたずらに中国を刺激することは決して好ましくありません。そしてそのような強い姿勢を日本が中国に対してとったところで、それではソ連は日ソ関係について譲歩してくるかという点、そうでもないと思うんですね。そうするとやはり全面的に拒否するという点よりも、結局はこの問題は一時凍結する、ないしは継続交渉する方向に持っていくことを考える必要があるのではないかと。それには幾つかの根拠を考えなければいけないんですが、意外に気付かれていないことで重要な問題があります。今さらそんなことをいって出してしまうかもしれませんが、中ソ関係は今日非常に悪化しています。中ソ間には日本を対象とした軍事条約があります。いうまでもなく一九五〇年のソ連と中国との中ソ友好同盟条約ですね。この期限は三十年間、一九八〇年にはこの期限が満了する。今日中国とソ連の間は確かにあのような対立を続

けていますが、少なくともこの条約の有効性については双方とも沈黙している。しかもこの条約の前文は明らかに日本を仮想敵国としたものなんですね。つまり形の上ではともかく今日中国、ソ連は日本を仮想敵国とした軍事条約を結んでいる。その軍事条約の有効期限のうちに、日本が中国と覇権問題を含むある意味での戦略的な背景を持つ条約を結ぶことが正しいかどうかという点、一ぺん考えてみる必要があるような気がします。しかも一九八〇年というのはもうそう遠い将来のことではなくて、しかも中ソ友好同盟条約は一年前に双方が意思表示しなければ自動延長になりますから、一九七九年の春には何らかの形で、中ソがこの条約をどう考えるかという最も根本的な問題をわれわれは見る事ができるわけです。そこまで待つというのは、今の新聞論調などからすればちょっと遠くなることですが、決して遠い将来のことではない。あと四年もないのです。少なくともその時点には、毛沢東の中国もあるいは大きな変化をもたらすかもしれない。毛亡きあと仮に鄧小平が全面的なイニシアチブをとった場合に、あるいは中ソ関係に大きな変化が起こらないとも限らない。なぜならば鄧小平はある意味での非常に深い戦略にたけた人物ですから、おそらく鄧小平の対ソ観と毛沢東の対ソ観というのは大きく違うと思うんです。六三年にスロフとわたり合ったから彼は反ソだといいますが、それではなぜ実権派として毛沢東に批判されたのか。鄧小平の反ソ感はベトナム戦争を考えてみても、ああいう状況のときはソ連とやっぱり統一行動を組むべきだという立場であり、その限界内でソ連と理論闘争をしようという限りでの反ソ観で、毛沢東のように完全にソ連と訣別せよという反ソ観ではなかったように思います。そうすると、仮にもしも今後——私はいくつかの可能性は非常に少ないと思いますが、アジアの情勢が非常に流動化する、朝鮮半島が極めて不安定な状況になるというようなことが起こると仮定した場合に、そのときに毛沢東亡きあとの中国は鄧小平の

時代に仮になつてみるとすると、そのときに中ソ関係はたして今日のままであるかということを考えたとときに、かなりの変化をわれわれは考えておかなければいけない。そうするとやはり中ソ友好同盟条約が一方で生きてくる可能性もなきにしもあらずでして、私の今の筋書きは思いつくままのスペキュレーションにすぎないにしても、それは当らないほうがいいのですが、にもかかわらずそういうふうな流動性をやっぱり考えておかないといけない。条約というものは国家百年の計を卜するものであるが故に、そういう幾つかの不安要因なり、もう一つには形の上であっても中ソ軍事同盟条約が一方に残っている段階で、日中間が戦略的な背景を含むる種の準軍事条約と思われるようなものを——もちろん日本は軍備を持ちませんが、日本が受け入れるということにも問題があるような気がするわけです。この辺は実は中国側に強くただしてみる必要があるのじゃないでしょうか。日本政府もここまで日中関係が深まっているのですから、中国側に、中ソ友好同盟条約は日本を仮想敵国にしているではないか、まず覇権ということを主張する前に、この問題について実は中国の意見を聞きたいのだ。日本にとっても安全保障上非常に重要な関心事であるし、日本は平和国家に徹しなければいけない以上軍事力を持たない。だからこの問題についての意見を聞きたい、というところまで中国側に問題を提起することも必要であり、中ソ条約は死文化したという周恩来発言だけでは不十分だと思います。どうも日中外交は常に日本が受身にできていますから、この辺で本当の日中関係を安定的に形成していくためにも、日本側からの先方に対する問題提起がもっとあっていいような気がします。

そのようなことを含めて今日は多面的な問題をお話しましたが、必ずしも整理がついた話ではなくて、幾つかのメモを見ながらでしたので、前後の関係であるいはお聞き苦しい点があったかと思えますけれど、も、皆さんに対する問題提起としては、むしろ皆さん方のご意見をこれから承れるという点でよかったのではないかという気もしないではありません。また中ソ関係、モンゴルの現状などについてもお話する時間がありませんでしたが、もしも討論の中でできればお話してみたいと思います。

質 疑 応 答

A 一つは図書館等がいまだに閉鎖しているということですが、それは文革以降ずっとしているのでしょうか。それはどういう理由でやっているかということですね。

答 どうもそのようです。一つには北京図書館、それから科学院の図書館等々一切中国の民衆はまだ入れない。外国人も入れない。ただこの間吉川幸次郎先生が北京図書館に行ったというようなことをちょっと書いておられました。あれは特別の配慮で行かれたのかもしれない。やっぱりそれは文化大革命なり批林批孔運動なりのイデオロギー問題と結びついて、特に歴史的な評価が今大きく変わりつつある、そういう状況ではないかと思うのです。これは小川大使からも伺ったのですが、大使のご夫人が中国についていろいろお詳しく、大使館員にレクチャーをされるためにぜひ図書館に一度行きたいという希望を出されていてもなかなか実現しないとかで、大使の夫人でさえもまだ実現しないということをごぼされておりましたので、おそらく事実だろうと思います。

A それから批林批孔運動というのは余り大衆レベルには影響が少ないということですが、昨年の中国

の工業生産が一昨年に比べて落ちていくというようなことを、台湾のほうでも秘密文書で手に入れたといっています。私はその理由として批林批孔運動で、文革のときほどではないにしても生産が落ちたのではないかと考えていたのですが、そうするとそういうことはほとんど当然なことになるのでしょうか。

答 批林批孔運動は昨年夏の頃まではかなり大衆の間にも拡大する傾向を見せていました。ご承知のようにあそこには、一方に明らかに周恩来批判が含まれ、他方ではその決定打が出ないまま周恩来の側からする毛沢東側近体制への批判が含まれていたと思うんですね。例えば『光明日報』の回収事件(昨年七月)にみる韓非子批判などは明らかにそうです。姚文元論文を見ればわかるように、実に中国人というのは、赤旗を掲げて赤旗に反対したり、そういうことを見抜く才能にたけていると同時に、そういうことを使っているいろいろなキャンペーンをやるといっているのは本当に中国人らしいと思います。周恩来批判に相当するような言葉が幾つかあったことは明らかに思うのです。しかしながら両者の決定打が結局出なくて去年の十月段階の毛沢東指示などがあり、情勢は収束する方向に、いわば再団結の方向に行き始めました。それからは、幹部と知識人を対象とする細かいスコラ哲学的な論争になっているのじゃないかという気がします。これにはいろいろ見方があって、北京の新聞記者の中にもやはり文革と批林批孔運動によって中国の躍進は続いたのだ、北京の町に八年ぶりに行って見て、確かに品物が多くなっているがそれも批林批孔運動の偉大な成果だ、という人がいますが、ただ逆に考えると、八年という変化は、オイルショックだ不況だとはいえ六〇年代の後半は非常に世界的に成長が続いたわけで、そういうことからすると、中国があれほど批判する「ブルジョア社会」のソ連も、今回四年ぶりで行ってみると着るものもみんなよくなっていますから、どうもそういうことだけでは判断できないような気がします。

B アメリカがインドシナから撤退することに関連して、米中の友好関係と、金日成が北京にきた、北鮮と中共、ソ連との関係などをどういうふうにごらんになりますか。

答 今日最近の中国情勢ということで余り国際関係をお話しなかったのですが、今のは非常に重要な質問ですので、私の感じを若干述べさせていただきます。金日成の北京訪問に際して中国がまれにみる歓迎をしました。ニクソン訪中を上回る歓迎態勢でした。中国があれほど歓迎することはやはりそこに多くの問題があったからだと思えるのが、中国問題を理解する正しい見方だと思うんです。ご承知のように北朝鮮は確か今から三年くらい前に許淡外務大臣が中国に行っているだけで、あれほど重要な関わり合いがあるはずなのに、この間北朝鮮と中国とのトップクラスの会談はほとんどなかったと思うのです。そこにもってきてインドシナ半島の情勢は非常に流動化しました。北側の南北統一問題に対する最近の見解を見てみますと、南側に対してある意味でチャレンジングな方向が出ていたと思うのです。最近、大変大規模なトンネルが掘られているとかいわれていますが、それはさておいてもそういう傾向があるので、もしもインドシナ半島の教訓を北側が学んで再び南下政策なり武力統一というようなことをすると、今の中ソ関係から見ても、中国にとって非常に大きな問題をつきつけられることになると思うのです。中国は依然として大国間の枠組においては、中ソ対立が厳しいだけに米中の枠組は是非守っておきたい、日中関係も維持したいというデータの方向ですから、朝鮮半島が非常に流動的な動乱になることは中国は現在欲していないだろうと思うんです。少なくとも周恩来報告などに見る限り、当面中国自身が経済建設を中心とする着実な方向を目指しているだけに、朝鮮半島の将来については中国自身がむしろ北朝鮮側の意思

を確かめたのではないか。そしてこの秋予定のフォード訪中を中国がどう迎えるかということとは、逆に今度は北朝鮮側にとっても大きな関心事であります。インドシナ半島から撤退していくアメリカが韓国に対する援助をむしろ増大するのかもしれないのか、そういう点からも、私は金日成が今回、まさにインドシナ半島の急変直後に向こうに行く必要があったような気がするんですね。まだ中朝共同声明は出ていませんが、どちらかという中国はおそらく金日成を押さえる役に回るのじゃないかという予測を私は私はいっているんです。それにはいろいろ理由があるわけで、中国自身もアメリカとの関係を基本的には崩したくないという問題があり、それからインドシナ半島とは違って朝鮮半島に再び火がつくというようなことは中国にとっても大変な問題である。そのほかに北朝鮮の側も経済が必ずしもうまくないなどいろいろ問題があるわけですが、大いに注目して見る必要があるという点では私も同感です。ただもう一つの問題、フォード大統領がこの秋に訪中した場合に、はたして米中正常化までいくのか。これは蒋介石亡きあとの台湾情勢ともからんで非常に大きな問題と思いますが、この辺はどうなんでしょうか。むしろ皆さん方のご意見を伺いたいんですが。先頃『ニューズウィーク』などは日本型の正常化、つまり台湾とは民間レベルにして国交正常化にいくのではないかとという推測も出ているわけです。その場合には米華防衛条約をどうするか。この問題を残しておいて中国がアメリカと国交を樹立するということはどうも考えられないような気がします。そうすると実際には今台湾に、米軍は既に軍事顧問団の数千しかいないんですが、そのことをかなり大きくセンセーショナルに報ずることによってそれをいわばおみやげにして、台湾からの軍事的な撤退ということでフォード訪中のハッピングにするかどうか。それは今後のインドシナ半島の情勢の推移にもかかってくるような気がします。仮にベトナム情勢が逆に何らかのアメリカの軍事的な介入をささうとか——これはほとんどあり得ない、ますますあり得なくなりましたね、最近のチヌー政権の辞任で———そういうことがあれば、場合によるとフォード訪中が中国からキャンセルされざるを得ないような状況もあるかもしれませんが、そういう点でも大いに注目すべきじゃないかと思えます。

C 中国の、ことに周恩来が病気になって病中からいろいろ指図をしている時期での、それから現在までの中国の政局全体の見通しについては、今日はあまりお話がありませんでしたが、暫定的な体制であるという点では私も同感ですが、確かに毛沢東の死は中国にとって政治不安の大きな原因になるのですが、周恩来の死も今の段階では非常に政局が混乱する原因になると思うのです。私は文革中に批判された旧幹部の登用、鄧小平などはその一番典型的な例ですが、それと実務派との一つの合同というのは、一つの政局の安定、あるいは毛沢東以後の体制作りの努力として周恩来が非常に苦心しているところだと思えます。同時にいわゆる左派も今のところは非常に息をひそめているようですが、完全に消滅してはいないということとは姚文元の論文にもよく出ていると思えます。そういう全体の政局の中の力関係は今大体どういうふうになっておりましょうか。

答 どうも非常に難しい問題です。確かに十全大会以降の状況を見てみますと、周恩来を中心とする実務派グループと旧幹部との、ある意味での新しい連合体制のもとに十全体制というものがあつたような気がするのですが、それと同時に中からは既に王洪文、姚文元などによる反潮流の突き上げがあつた。そのことによつて昨年の春頃までは逆に周恩来が追いつめられていたんだと私は見るんです。そして壁新聞などが出て、この壁新聞の主たる攻撃目標は党委員会ではなくて革命委員会、革命委員会の背後にある國務院に対する批判であつたというふうにも見られますね。そして批林批孔運動というものがそういう形で、ま

さに暗黙のうちに周恩来に的を集中し始めたものではなかったかという気がします。たまたま周恩来は病気にもなった。しかしながら中国にとって周恩来を失うことの重要性、一方は、にもかかわらず官僚機構の中にかなり厚い壁があったところから、逆に周恩来側のある一種の巻き返しみたいなのが今回の全人代まであったのじゃないか。そのことは『光明日報』の回収事件に見られるように、明らかに今度は毛沢東側近体制を批判するような論調も見られる。こういうふうには私が見ており、その一つの結接点として去年の秋十月の毛沢東の「中共中央二十六号文献」が出た。一つの再団結の方向にあって、両方も一種の妥協のもとに全人代が開催されたのではないか。全人代に毛沢東が出なかったことをいろいろ意見もあります。私は毛がマルタのミントフ首相と会っているテレビを北京で見ましたが、そのミントフは毛沢東と会って、その日のうちに帰国しているんですね。そういうことからすると、毛はかなり北京に近いところにいたと思うんです。伝えられるように武漢にいて三十数項目の自己批判をしたというのは、あれはシドニー・リューという『ニューズウィーク』の香港特派員が伝えたんですが、彼はちょうどモスクワにこの正月いまして、あれは実はちょっと誇大な伝えられ方をしたんで、実際には武漢で毛沢東が三十七項目に渡ってしゃべったその中に林彪を後継者にしたことは誤りであったというのがあって、それがすべて毛沢東は自己批判したみに伝わったので、決して自己批判したのではないんですね。そうすると毛沢東はどこか北京に近いところにいたらしい。そのことはやがて西独のシュトラウスが帰ってからシュピ―ゲルに「二時間ほど車に乗ったところに行った」といったことから、どこかその辺にいたらしいんですね。そうすると毛沢東は特に不満があったというよりは、あるいはもう自分は制度的には超然的なところにするることになったわけだから欠席したんだ、というふうに考えることもできる。そうするとやはり主として人事面を中心として実務派が大きく今度もクローズアップされたことは疑いない。これをもう一ぺんひっくり返そうというような、再度の反潮流運動がどうも最近の姚文元論文ではないかというふうに私は見るわけです。ただそれだけのエネルギーがあるかどうか疑問ですが、そうするとどうも中国は、そういう循環を繰り返しながら政治的にかなり不安定だけれども、経済建設や国際社会への対応などのいわば時代の要請が非常に強いから、この点では周恩来グループに利するような気がします。そこで鍵を握るのは私は鄧小平じゃないかと思えます。鄧小平は私もかつてその復権を予測しましたが、しかしながら文革のときは一度実権派としてむしろ周恩来も劉少奇、鄧小平、彭真と一緒にグループにいたにもかかわらず、周恩来だけが毛沢東に忠誠を誓うようになって鄧小平が見捨てられたことに対して、やはり必ずどこかに根を持つていような気がします。最近の鄧小平の動きを見ると、復権するときはいわば旧幹部の復権という、脱文革の潮流のもとで復権したような動きをたどりながら、例えば去年の春の国連総会における演説などはかなりラジカルなことをいい始めているんですね。そうするとやはり鄧小平は毛沢東側の弱みも周恩来側の弱みも十分知り尽した上で、どちらかというところかなり原則的なことをいい始めているような気がして、一つの鍵を握る人物ではないかという気がするんです。それから最近おもしろいことは、毛沢東は元氣だけれども周恩来は病氣ですと、鄧小平があえていっているんですね。これも非常におもしろいことです。ですからもしも周恩来に万が一ということがあれば、一応鄧小平がそこに出てくる。そして張春橋というような有能な中堅とコンビネーションを組んで、毛の死後まで待つというようになりそうなくも思います。十分な答えになっていませんが、全体的にはそんなところじゃないかと思えます。

C 現在中国も今の国際社会の一つの態勢に適應しなければならなくなってきたということは、いろいろ

るな派閥を通じて大体はある程度考えていいことだと思えます。ソ連でもフルシチョフ時代に入るちよつと前あたりでこの問題はかなり政府の中の大きな問題になり、結局そういう歴史の潮流、世界の大勢に引っぱられて、フルシチョフのいわゆる交流時代に入ってきたわけです。そういう場合に一般国民の考え方が変わってくる。現在の中国でもさっきおっしゃったように、ノーマリゼーションというような一種のノンポリ的な傾向が瀰漫しているのですが、いくら共産主義社会で最後に権力である程度までは押しつぶせても、世論の流れ方、全体の気分の変り方は、政局をある程度動かしていく要因になると思うのですが、その辺はどうですか。

答 まさに私もそういう点で、実は現在の中国はある意味のポイント・オブ・ノーリタン、もう返らない地点を、日中外交を通じてもそうですが踏み切ってしまったんではないかと思うのです。ただそういう状況の中である意味でのノンポリ的な状況、もう文革はごめんだというような一種の脱政治という動きがありますね。私もそれをまず初めに申し上げた。であるが故にまた姚文元や張春橋のああいふ問題提起があるわけですね。ただ毛沢東というカリスマがなくなったあと、はたしてそういう問題提起ができるかどうか。情勢としてはやはり実務派的な空気が強くなるという気がします。

D 地下道を通って要人は大会堂へ集まったというお話がありました。地下道や地下街というものが非常に発達しているらしいのですが、ごらんになったのでしょうか。

答 いえ、私は今回は向こうの招待でなかったものから、残念でしたが見ることはできませんでした。地下鉄はもう通っておりますね。地下鉄も外国人は乗ることができませんから、大使館の人なども許可を得て一定の距離だけ、それも中央の部分だけ乗ることができると。地下街については私はのぞきませんでしたが、一般には、前門外の商店から続いている地下道を外国人に見せています。いろいろな話を聞きますと、かなりの地下街がずっと堀りめぐらされていて、北京近郊の農村を含めて約五分間に八〇%の民衆が避難できるものがあるそうです。あらゆるところに枝をはって、主なホテルとか、もちろん中南海、人民大会堂、全部地下道があるわけですね。あの時期私も向こうにいて、あれほどみな見張っているのにわからないというのは、やはり地下道以外にない。そのことは今中国が主張している、非常に皮肉なことですが、地下道を堀れという、これが毛主席の重大な指示だということからいっても妥当ではないかという気がします。

D 地下道は軍事的な意味のほかに、普通の生活、市民生活というほうにも相当使われているんですか。答 まだそこまではいいないようです。

D 二十年ばかり前に、中国共産党は原爆などこわくない。半分死んでも半分残っていると、そのあとで新しい資本主義とは違う新しい立派な文明を作るといふようなことをいいましたね。それと結びつけて考えますと、地下へもぐって何か新しいものを作ろうとしているのかどうか。例えば海洋法会議などで海の面積、自由行動の面積が狭くなれば、深海で魚をとるなどのやり方をしないと三十八億から増加していく人類の生活の場面ということがあるでしょう。そういうところと考え合わせますと、人間八億にもなったら地面の中も相当使われないと生きていけないのじゃないか。そのいうふうなことを結び合わせて地下道のことを一度考えてみてもらいたいと思います。別にご回答はいりませんが。

るわけですから、ハノイ即中ソ援助と結びつけるのはちょっと短絡的ではなからうかという感じを受けます。

既刊のもの

No 72	インドの共産主義運動	セン・グプタ氏述
No 71	ソ連経済の最近の動き	金田辰夫氏述
No 70	最近の日中関係について	小川平四郎氏述
No 69	シベリア開発問題について	澄田智氏述
No 68	最近の中国事情について	桑原寿二氏述
No 67	ソ連の戦略構想と戦力	カール・ヤコブセン氏述
No 66	最近のソ連内外事情	中江要介氏述
	ソ連のエネルギー問題について	黒田瑞夫氏述
	東欧諸国の近況について	R・キヤンベル氏述
	最近の日中関係について	永田実氏述
	ソ連経済の近況	H・ベルツゲン氏述

昭和50年12月発行
 欧ア協会シリーズ No.73
 発行所 社団法人 欧ア協会
 東京都港区芝西久保桜川11番地
 有間ビル
 電話 (501) { 0 8 2 9
 0 8 3 0
 振替口座東京 9 1 0 6 5 番
 印刷所 大日本法令印刷株式会社
 東京都港区西新橋 3-6-10
 電話 (434) 8 6 4 1 (代)

定価百円 (送料共)

本冊子から引用される場合は出所を明記し、長文にわたる場合は事前に当協会にご連絡下さい。なお、本冊子の内容は必ずしも当協会の見解を表明するものではありません。